

高養研

発行 北海道高等学校養護教諭研究会
事務局 北海道札幌月寒高等学校
〒062-0051 札幌市豊平区東1条3丁目1-1
TEL 011-851-3111 FAX 011-851-3112
<http://koyoken.sakura.ed.jp/myks/hyousi.html>

北海道高等学校養護教諭研究会第37回研究協議会の様子

令和4年7月27日(水)と28日(木)の両日に3年ぶりに対面で開催された北海道高等学校養護教諭研究会第37回研究協議会の様子を紹介します。

今年は、講師に斉藤美香氏(札幌学院大学心理学部 教授、心理臨床センター長)と、那須亨氏(医療法人大植会 葛城病院 救急科部長、元・和歌山県立医科大学 救急集中治療医療講座講師)を、研究発表に中山知美氏(北海道帯広三条高等学校養護教諭)をお迎えし、また多くの会員の皆さまの出席により、活発な研究協議会となりました。高養研ホームページに研究協議会の詳細がありますので、是非そちらも併せてご覧ください。

講演1では、「学校における自死予防対策について」と題して、斉藤美香氏に青年期の心理的傾向や高校生の自死の現状などについて、詳細なデータを基にわかりやすく丁寧にお話しくださり、今後の保健室における関わり方のヒントをたくさん教えていただきました。



講演2は那須亨氏による「ケーススタディーで学ぶ重症と軽症の見極め方」という講演でした。“救急車を呼ぶべきかの見極めができる”、“フィジカルアセスメントについて理解する”を目標に、頭部打撲や火傷のケーススタディーなどを会場の先生方とコミュニケーションを取りながら楽しく学ぶことができました。

研究発表は、十勝地区の中山知美氏より「養護教諭から繋げる学校保健」と題して、養護教諭が1人で抱えがちな学校保健に関する業務を教職員の理解と協力を得て学校全体で取り組んだ実践を発表していただきました。また、グループワークでは養護教諭ならではの悩みや多岐にわたる職務について各校の現状や工夫を話し合い、学びの多い時間となりました。



また、北海道教育庁学校教育局健康・体育課 健康・体育指導係主査 篠原弥智氏による情報提供では、最新の情報をわかりやすくまとめて、ご説明くださいました。新型コロナウイルス感染症への対応や、ICT教育が進むなかでの健康への配慮について等、日常の職務に大変参考になる内容ばかりでした。

3年ぶりの対面開催の研究協議会に多くの会員の皆さまにご参加いただきました。この場をお借りしまして、感謝を申し上げます。

北海道高等学校教育研究会大会第37回養護部会のお知らせ

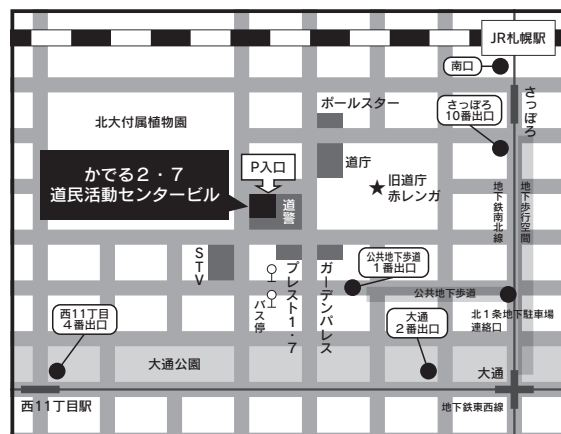
【主 題】 現代的な健康課題の解決と学校保健活動の推進をめざして

【日 時】 令和5年1月12日(木) 9:20～

【場 所】 北海道立道民活動センター かでる2・7

【開催方法】 今後の新型コロナウイルスの感染状況によっては、オンライン等での開催になる可能性もあります。

【参加申込】 参加申し込みは各学校で集約しています。当日会場でも参加を受け付けますが、資料等準備の関係上、できるだけ事前申し込みをお願いいたします。



【日 程】

9:20	9:40	9:50	11:50	12:10	13:30	14:50	15:20
受付	開会式	講演	総会	休憩	研究発表	情報提供	閉会式

【内 容】

講演

演 題 「家族理解こそが支援である」

講 師 家族心理臨床家 漫画家 団 士郎 氏

〔講演要旨〕

誰にも理解されていないと思い込んだ人が事件を起こしています。あつてはならないような事態が、孤独な家族に起きます。

今、私達の社会はプライバシーを言い過ぎることで、お互いが誰も知らない、知られていない世界を作り出しています。そんなところで活発なのが匿名通報や、SNSでの誹謗中傷、炎上です。そしてひとたび事件が起きると、専門家に頼りっぱなしの援助要請。

こんな事を繰り返していたら、誰も自分自身を信頼できないし、誰かに暖かくもなれません。安全で治安が良い国と思っている市民が感じる幸福度の低さは、世界の人々には理解できません。私達はどうすれば良いのか、分からなくなっています。

その答えが「家族理解」にあると私は考えています。専門技術や専門用語ではなく、普通の人が幸せに暮らすために重要なことが、理解し、理解される事なのです。短編マンガ「木陰の物語」を使って、そんなお話をします。

〔略 歴〕

公立児童相談機関、障害者相談機関の心理職25年を経て1998年に独立。

仕事場D・A・N 主宰/漫画家/現在、立命館大学客員教授

全国で家族理解ワークショップを継続開催中。(札幌でも年2回)

Zoom講座も開講中。詳細はHP「士郎さん.com」に。

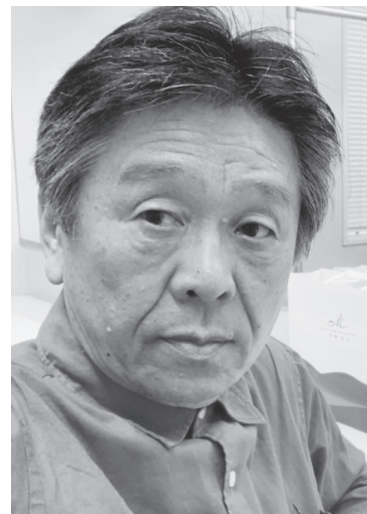
〔著 書〕

「家族理解入門」(中央法規出版)

マンガ「家族の練習問題」1巻～9巻(ホンブロック刊)

不登校の解法/家族力×相談力(共に文春新書)、他多数。

月刊「学校教育相談」ほんの森出版(「木陰の物語」連載中)



研究発表

テーマ 「事例から学ぶ健康相談～道南地区の継続研究から～」

北海道江差高等学校 養護教諭 古瀬 あかり 氏

〔研究発表要旨〕

道南地区高等学校養護教員研究会で2017～2019年度に3カ年計画で実施した「継続研究」において、私が所属していた「健康相談」グループの成果について発表します。本グループでは、「事例から学ぶ健康相談」と題し多くの事例検討を行いました。健康相談に関わる各校の資源を第一章、『教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引（文部科学省）』に準じて整理した事例集を第二章としてまとめ、地区で発表しました。

今回の発表では、本研究における成果を発表させていただくとともに、「継続研究」について紹介し、地区での研究の在り方について参加者の方々と交流できたらと思います。

助言・情報提供

「学校保健の課題とその対応」

北海道教育庁学校教育局健康・体育課 健康・体育指導係

主査 篠原 弥智 氏



【全国養護教諭連絡協議会 第24回研修会参加報告】

北海道札幌稲雲高等学校 堀川智恵 先生

全養連第24回研修会に参加しました。2日日程で動画収録されたWEB開催（動画配信）で、4人の講師の方のご講演でした。

富山大学学術研究部医学系小児科学講師 種市尋宙先生のご講演は2つあり、1つは子どもの脳死・臓器提供・移植等について、2つ目はコロナについてでした。子どもの脳死・臓器提供・移植では、日本の臓器提供を待つ患者さんの非常に厳しい現状と、突然我が子が脳死となった親の死の受容の難しさ等、深く考えさせられました。日本は死を語ることを避ける傾向がありますが、日頃から「命を考える・語る」ことが必要だと強く感じました。コロナについての講演では、2020年4、5月に人口10万対発生数・死亡数が全国ワースト2～3位になった富山県で、クラスターが発生した学校に医療側としてすぐにアプローチし、その後教育委員会と連携しながら、教育的意義の大きな行事をコロナ前に近い方法で実現できるまでに県内の態勢を整えた内容には非常に驚き、withコロナ時代の希望を感じました。

他にも、文京学院大学保健医療技術学部教授 樋口桂先生のからだの仕組みの楽しい学び方、早稲田大学教育学部教授 本田恵子先生のアンガーマネジメントを活用した保護者対応、千葉市立海浜病院救急科主任 医長・NPO法人ちば救命・AED普及研究会理事長の本間洋輔先生による学校における救急対応計画の策定についての講演がありました。2日間分のWEB視聴は時間が確保できるか不安でしたが、途中何度も一時停止ボタンを押しながらも、全ての講演が非常に勉強になる素晴らしい内容だったため集中し、充実した研修を受けることができました。

北海道恵庭南高等学校 加賀陽子 先生

第24回研修会を視聴しました。配信期間が令和4年8月8日から9月5日までのWEB開催で、4名の講師による5講演で構成されておりました。

各講演の感想をお伝えします。種市尋宙氏による「子どもたちと生命倫理について考えるー海外渡航移植と国内臓器提供ー」では、こどもの命と向き合う現場の方々の思いに胸が締め付けられる場面がありました。また「小児新型コロナウイルス感染症のこれまでとこれから」では、医療と教育がタッグを組み、それぞれの強みを活かした工夫で子どもを守るその熱意と努力に心を打たれると共に、医療と協力することの心強さを感じました。樋口桂氏の「身近な解剖学ーからだの仕組みを楽しく学ぼうー」では、想像は思いやりの第一歩。見えないから相手の立場に立って想像する。カラダの内面に想像力を働かせることが自分の身体を思いやることであり健康教育の第一歩。冒頭でのこの言葉が印象的でした。本田恵子氏による「対応が難しい保護者への理解と対応ーアンガーマネジメントの活用ー」は、生徒や保護者への対応について、ケースごとに具体的な方策を示してくださり、すぐに役立つ内容でした。最後に「救急医から伝える救急処置のコツと学校における緊急対応計画の策定」では、「心臓突然死は減らせる」という言葉に納得のいく模擬授業が展開され、楽しく学ぶ時間を体感し、保健指導の可能性がさらに拓けました。

どの講演も専門的立場から保健室での執務に活用できる知識や方策を深く掘り下げて話され、とても有意義な時間を過ごすことができました。今回の研修会を保健室経営に反映させるべく毎日の執務に励もうと決意し、夏休み明けをスタートしました。

会員だより ～「北海道高等学校養護教諭研究会に参加して」

3名の会員の方に意見・感想をいただきました。お忙しい中お引き受けくださり、心より感謝申し上げます。

大学を卒業してからの2年間、札幌市の小学校で学級担任として勤務していました。ご縁があり本校に赴任しましたが、今回の研究協議会に参加し、養護教諭として働く上で必要な知識や考え方が足りなかったことを痛感しました。

中山先生の発表にもあったように、学校保健の中の業務をワークシェアすることで、生徒の情報をより把握してもらえる機会が増えるのは、生徒にとってとても良いことだと思います。教員が生徒の情報を多く持っていれば、生徒に対するアプローチの選択肢が増え、関係を築きやすくなります。生徒も、自分のことを理解してくれている教員には、話したい、頼りたいと思ってくれるのではないのでしょうか。そして、そんな教員の数が多ければ、生徒が頼る先の選択肢が増え、生徒の安心につながるのではないのでしょうか。学校保健を多くの職員で支えることは、養護教諭の負担を軽くするだけでなく、回り回って生徒のためになることなのだと気付くことができました。去年まではこんなこと考えもせず、ただ降りてくる仕事をこなしていただけだったな…と、前任校の養護教諭に申し訳なくります。これからも、立ち止まって考えることを習慣付けて、研鑽を積んでいこうと思います。本当にたくさんの方のことを学んだ2日間でした。このような機会をいただき、ありがとうございました。

北海道旭川東高等学校定時制 太田 安紀

この度は、大変な状況にも関わらず研究協議会を開催していただき誠にありがとうございます。今回参加させていただいたことで、必要な情報や知識が身につけ、幅広く学校保健に携わる役割であることを改めて実感しました。

2つの講演では、時代の変化による子どもの心理的傾向や関わり方、また応急処置の緊急度の判断やその対応について学ぶ事ができました。メンタルヘルスの支援では、「どう関わればいいのか」と悩む場面がありますが、リスクアセスメントした上で連携することや、ピアサポート教育や大人への教育にフォーカスし助け合う関係づくりの必要性を学びました。緊張感が高い応急処置については、医学的知識と根拠を学び、改めてバイタルサインの必要性や、救急要請を判断するまでのフィジカルアセスメントを分かりやすく提供していただいたので、緊張を少しでも軽減し落ち着いて対応したいと思います。

養護教諭が心と体のプロになれるよう、子どもの発達段階に応じて関わっていきたいと思いました。今後も一人一人の子どもたちに寄り添い、自尊心を高められるよう専門性を活かし、学校全体で教育活動の充実につなげていきたいと思っています。

北海道訓子府高等学校 田中 帆乃香

毎回、本研究協議会に参加すると、講演から新しい情報を得ることができ、また、各地でご活躍されている養護教諭の先生方から、多くの刺激をいただき、新たに頑張ろうという気持ちにさせてくれる、貴重な機会だと感じています。

今回の研究協議会では、斉藤先生のご講演の中で、援助要請行動に関わる様々なデータの紹介と合わせて「SOSが出せる環境作りが大切」とのお話がありました。コロナ禍といわれる状況の中、本校でも、生徒の心理面への影響が気になっており、何かできることはないかと考えていたため、今後、取り組むべきことのヒントをいただくことができました。

気がつけば、養護教諭として様々な生徒と関わり20年近く経過しましたが、学生の頃に初めて学んだ「養護教諭とは」という問いが、常に自分の中にあり続けています。養護教諭の仕事とは、養護教諭のありかたとは…、まだまだ迷い、悩むことも多いのですが、その時代、その場所によって求められる養護教諭の役割が異なるのは、難しさであると同時に、面白さを感じる部分であると思っています。

日々の業務に追われ、新たな取り組みに挑む気力や、新しい視点を失ってしまいがちですが、これから先、様々なことに柔軟に対応できる養護教諭であるために、今回のような研修の機会を大切に、専門性を磨き続けたいと思っています。そして、自分の中の「養護教諭とは」をかたちづかっていきたいです。

北海道苫小牧西高等学校 続橋 沙織